

「認知言語学論考」執筆要項 v3.0

ご執筆の際に、以下の要項に沿っていただくと幸いです。より詳細な内容は、以下のひつじ書房ウェブサイトをご覧ください。本執筆要項は「ひつじ書房執筆要項」から主な部分を抜粋し、本シリーズ用に若干アレンジしたものです。<http://www.hituzi.co.jp/sippitu/>

原稿提出前に、以下のチェック一覧を利用して最終確認を頂けますと幸いです。章末参考文献の並び順は後からの変更が困難なので、特にご注意下さい。

チェック一覧

- ☐ フッターに執筆者名、ページ番号を挿入する。
- ☐ 句読点 「、」「。」を使用。（「,」「.」を使用しない）
- ☐ 見出しの階層 1. 1.1 1.1.1 とする。0 から始めない。言及する際は節と呼ぶ（→例：1 節では…、1.1 節では…）
- ☐ 数字 熟語を除き、算用数字を使用する
1 人 1 本 1 つ（~~×~~ 一人、一本、一つ・ひとつ）
- ☐ 漢字送りがな 内閣告示の本則とする
表す（~~×~~ 表わす）、行う（~~×~~ 行なう）
- ☐ ご自身の論考を指す場合は「本論」に統一（~~×~~ 本論文、本稿、本研究、本章）
- ☐ 例文 前後 1 行アキ

(1) a. 一年のうちでは、初夏がいい。
b. 年の暮れといえば、大晦日のことが… (山田 2001: 256) ←出典右寄せ

「a.」「b.」レベルの例文番号を本文中で挙げる場合は、括弧内に記号を入れる。
→例：(1a) では、(1a-c) では、（~~×~~ (1) a では、(1) (a) では……）
- ☐ 図表 番号をつけ、キャプションをつける。図は下に、表は上に番号とキャプションを配置する。
表 1 キャプション

- ☐ 注 本文の末尾に、参考文献の前に配置する。
- ☐ 謝辞 必要な場合は、注のはじめにアスタリスク「*」をつけて入れる。
- ☐ 山括弧〈 〉 概念や術語を囲むときには不等号< >ではなく、山括弧〈 〉を使用する
- ☐ 引用文献参照 Author-date system で統一する。著者の姓と発行年で引用文献の出典を示す。
書誌情報は章末の参考文献で示す。
→例：スミス（1976）の主張は、ホーンズ（1979）によって鋭く批評された

- **本文中の引用文献表記**
 - ・文中の場合 「山田 (1979) によれば」、「山田 (1979, 1981) によれば」、「山田 (1979: 21--23) によれば」
 - ・文末の場合 (安田 1977: 86) (Spitzberg and Cupach 1984: 21--22)
 - (✕ (安田 (1977: 86)) (Spitzberg and Cupach (1984: 21--22)) 括弧を重ねない)
 - **年の後のコロソ** 「:」は半角モノを使用し、後ろに半角アキを入れる→例: (1984: 21)
 - **章末参考文献** 並びはアルファベット順とする (和文と欧文を分けない。多言語を扱う場合には例外的に分ける) 以下の書式をご参照ください。
- 書式の例:
- ・**和文文献の場合**は都市名を入れない。サブタイトルは頭に全角ダッシュ (一) を1つ入れる。
澤田治美 (1993) 『視点と主観性—一日英語助動詞の分析』 ひつじ書房
 - ・**海外の文献の場合**は都市名を入れる。書籍や論文タイトルの単語の頭は大文字 (Title Case) とする。
Lakoff, George. (1987) Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind. Chicago: University of Chicago Press.
Stein, Dieter and Susan Wright. (eds.) (1995) Subjectivity and Subjectivisation. Cambridge: Cambridge University Press.
 - ・**翻訳書がある場合**は翻訳書の情報を入れる。
Blakemore, Diane. (1992) *Understanding Utterances: an Introduction to Pragmatics*. London: Basil Blackwell. (武内道子・山崎英一訳 (1994) 『ひとは発話をいかに理解するか』 ひつじ書房)
 - ・**雑誌の巻号表記**は、巻数 (号数) と掲載ページ数を必ず記載する。
堀田秀吾 (2009) 「実用の学としての法言語学」『月刊言語』 38(9): 8--15. 大修館書店
 - ・**論文集の場合**も掲載ページ数を記載する。
黄麗華 (2002) 「中国語の肯定応答表現—日本語と比較しながら」定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』 pp.47--60. ひつじ書房
Langacker, Ronald W. (1977) Syntactic Reanalysis. In Charles N. Li. (ed.) *Mechanisms of Syntactic Change*, pp. 57--139. Austin: University of Texas Press.

・入稿用データの提出に関して

●最終的に入稿用データをご提出いただく際には、Word にはりつけた画像データは、元の jpeg などのデータも、zip ファイルにまとめてお送りください。Word 上で自動的に解像度が下げられることがある為です。元のデータはなるべく解像度の高いものをご用意ください (300dpi 以上)。

●表やグラフは、作成元のエクセルデータも合わせてお送り下さい。全体でテイストを統一するために、エクセルの数字を元に正確に表を組版所で作成することができます。

●電子データの他に打ち出し原稿をお送りください。

A4 片面印刷

送付先:

〒112-0011

東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F

ひつじ書房 森脇 宛